

研究の概要

I 研究主題 「児童生徒の可能性を広げ、育む授業づくり ～ライフステージに応じたキャリア教育の視点から～」

II 主題設定の理由

1 本校の教育目標と児童生徒の進路の実態から

本校の教育目標は「自らの病気や障害を乗り越え、力いっぱい努力して明るく生きがいのある生活を送ることができる児童生徒を育てる」である。本年度の重点目標「(2)学習内容の改善と充実」には、「キャリア教育と職業教育の充実」を掲げている。

本校は病弱を主障害とする児童生徒と知的障害を主障害とする児童生徒に対して教育を行う知病併置校である。全校生徒32名のうち約8割が重度重複障害のある児童生徒で、半数近くが医療的ケア対象児童生徒である。卒業後は隣接する病院への継続入院となる生徒や、生活介護事業所、就労継続支援事業所、就労移行支援事業所へ通所する生徒が多いが、一般就労したり大学や短期大学へ進学したりする生徒もおり、児童生徒の進路は多様である。そのため、キャリア教育を実施することで個々に応じたキャリア発達を促すことが必要である。キャリア教育の視点から児童生徒一人一人の育成すべき力に注目し、小学部から高等部まで見通した授業づくりをすることで、社会的・職業的自立を果たす児童生徒を育成していくことが求められる。

2 特別支援教育の今日的な課題から

一人一人の児童生徒がそれぞれの障害の状態や発達の段階に応じ、ライフステージに応じたキャリア発達の課題を改善し、自立や社会参加に向けて必要な資質・能力を身に付けていくことは、特別支援教育の今日的な課題であり、本校の課題の一つでもある。病弱と重度重複障害等の多様な実態をもつ本校の児童生徒であるが、キャリア教育の視点をもって一人一人の教育的ニーズを捉え、個々の資質能力の向上を目指した授業を積み重ねることは、児童生徒のキャリア発達を促す授業につながるものであると考える。こうした取組を学校全体で共有し、教師一人一人が課題意識をもって実践し、授業検討等の話し合いを充実させていくことが必要であると考えます。

以上のことから、教師が児童生徒のライフステージに応じた課題について「キャリア教育」の視点を意識しながら、小集団での話し合いや授業実践に取り組むことで、児童生徒一人一人のキャリア発達を促すことにつながるのではないかと考え、本主題を設定した。

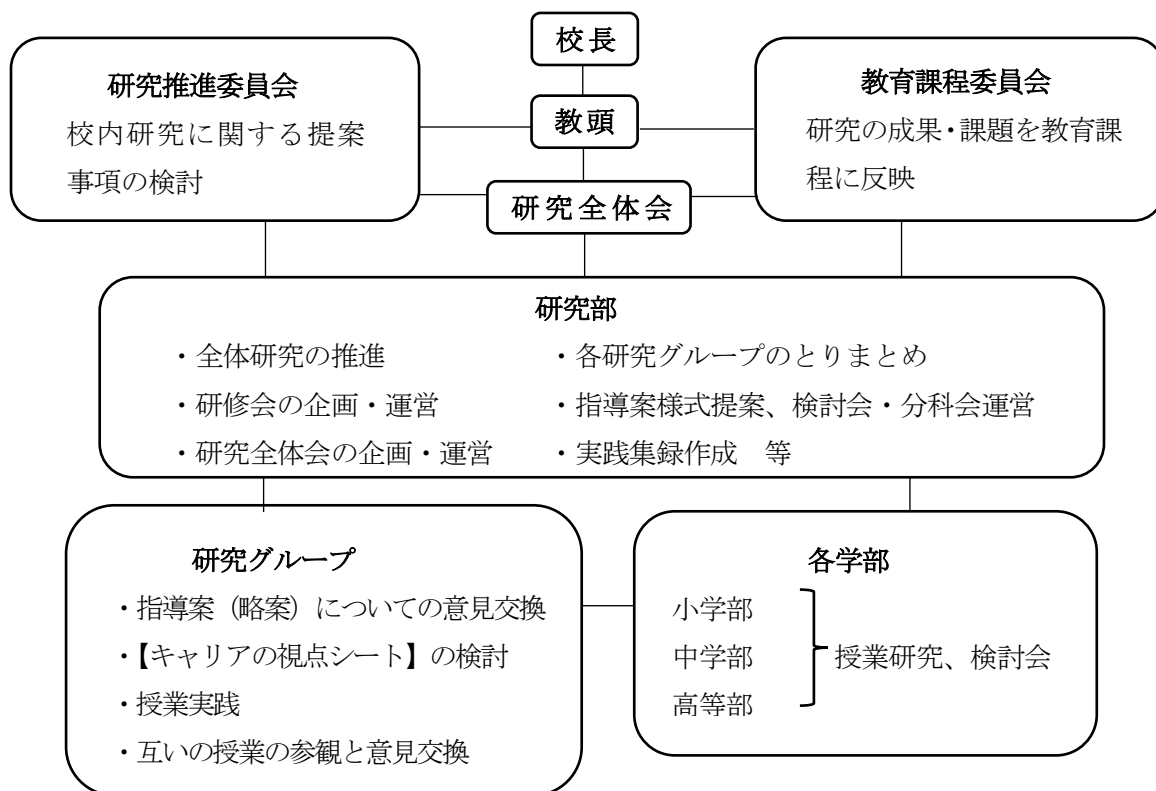
III 研究の目標

児童生徒一人一人の教育的ニーズについて、「ライフステージに応じたキャリア発達」の視点での課題意識をもち、授業実践と授業改善をとおして、児童生徒の可能性を広げ育む授業づくりを目指す。

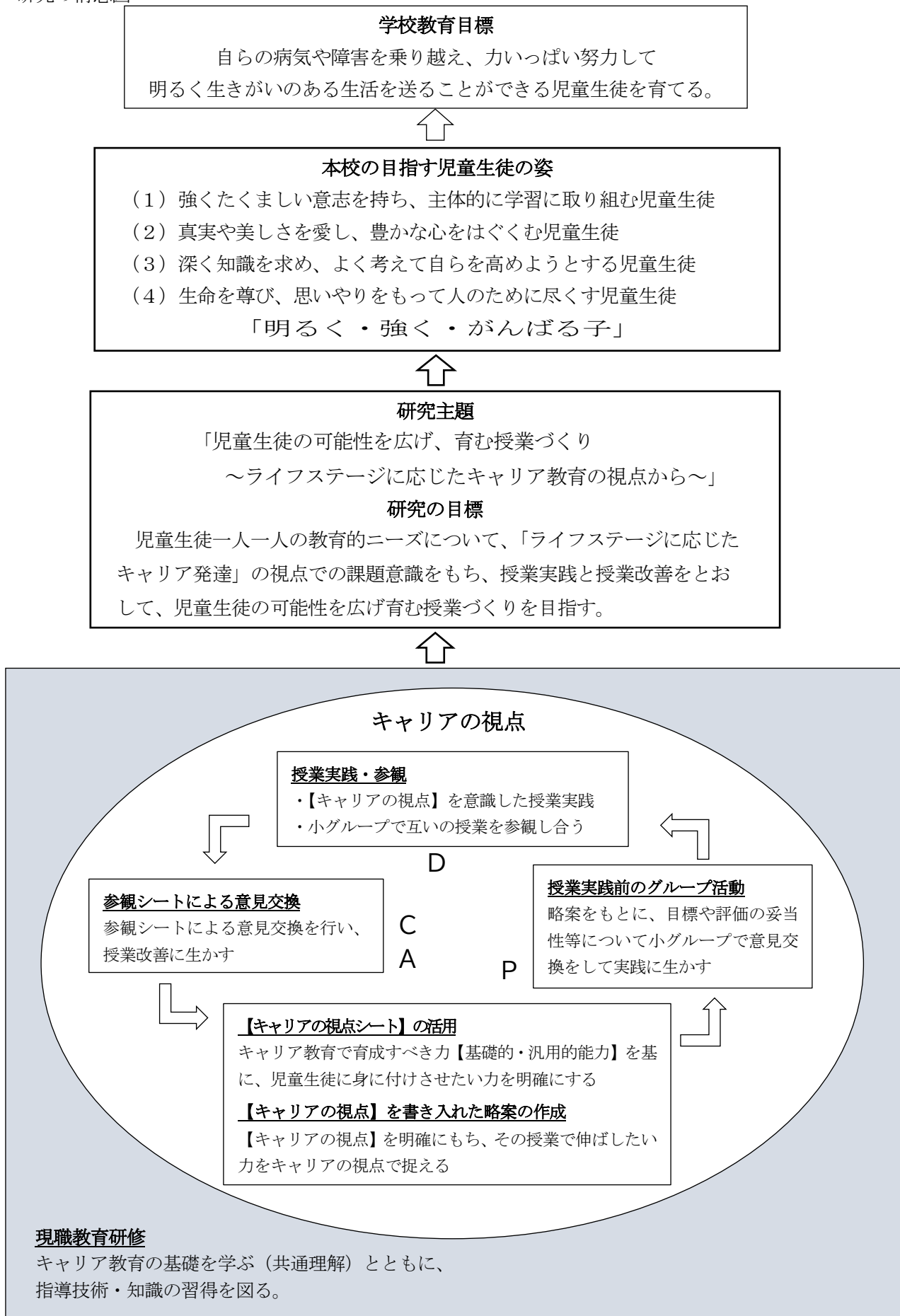
IV 研究仮説

個々の児童生徒の実態や目標、指導内容、評価等について、「キャリア教育」という共通の視点をもって授業実践をするとともに、互いの授業を参観し合い少人数での研究グループ活動で意見を交換し合うことにより、児童生徒一人一人のキャリア発達の可能性を広げ育む授業づくりができるのではないかと考える。

V 研究組織



VI 研究の構想図



VII 研究の内容と方法

1 研究の内容と方法

個々の教師がキャリア教育の視点を明らかにしながら指導案を作成して授業を実践し、互いに授業を参観し合っその反省を次の授業に生かす。また、研修会ではキャリア教育を学ぶとともに指導技術・知識の習得を図る。研究グループ活動においては、PDC Aサイクルの視点に基づき効果的な課題解決に向けて意見交換し合うとともに、研究全体会を通して成果と課題等を共有し、各々の授業改善に生かす。

1) 現職教育研修会で、キャリア教育の基礎を学びキャリア教育の視点について共通理解するとともに指導技術・知識の習得を図る。

2) 「キャリアの視点シート」(右図)を活用し、キャリア教育で育成すべき力「基礎的・汎用的能力」を基に、児童生徒に身に付けさせたい力を明確にする。さらに、【キャリアの視点】を書き入れた指導案(略案)を作成することで、その授業で伸ばしたい力を【キャリアの視点】で捉える。

3) 少人数グループを設定し、研究グループ活動を行う。研究グループ活動では、児童生徒の教育的ニーズをキャリア教育の視点でどのように捉えたらよいかを話し合ったり、略案をもとに目標や評価の妥当性等について意見交換を行ったりすることで、キャリア発達を促す授業づくりを行うとともに、教師がキャリア教育についての学びを深める。

4) 一人一回、【キャリアの視点】を意識した授業を実践する。参観期間を設定してグループ内で互いの授業を参観し合い、参観シートによる意見交換を行い、授業改善に生かす。

5) 年度末に研究全体会を実施し、研究グループ活動の成果について共有し、キャリア教育の視点をもった授業づくりについて研鑽を深める。

2 研究の計画(単年度で行う)

月	全体	授業研究・グループ活動	研究部会・研推委
4		4~5月 対象児童生徒と授業の決定	研推委① 4/19 校内研究の方向性
5	第1回研究全体会(5/1)		学校訪問指導案、略案、授業実践報告書の様式検討

R5校内研究 《キャリアの視点シート》		氏名
学部学級(コース)		学年・性別
対象児童生徒		
特に育成したい力(セルごと塗りつぶし:黄色)		
キャリア教育で育成すべき力「基礎的・汎用的能力」		
①人間関係形成・社会形成能力	他者の個性を理解する力	他者に働き掛ける力
	コミュニケーション・スキル	チームワーク
	リーダーシップ	
②自己理解・自己管理能力	自己の役割の理解	前向きに考える力
	自己の動機付け	忍耐力
	ストレスマネジメント	主体的行動
③課題対応能力	情報の理解・選択・処理	本質の理解
	原因の追究	課題発見
	計画立案	実行力
	評価・改善	
④キャリアプランニング能力	学ぶこと・働くことの意義や役割の理解	
	多様性の理解	将来設計
	選択	行動と改善
授業実践の予定について		
教科・領域		
内容		
本時の目標		

6	学校訪問指導案、略案、 授業実践報告書の様式確認 (6/15 職員会議)	6/9:「キャリアの視点シート」提出締切 6/27:研究日①(グループ活動1回目) (キャリアの視点シートを基に情報交換)	グループ検討 意識調査①まとめ
7	指導案検討会(7/24) 現職教育研修会①(7/25)		
8			
9	学校訪問指導(9/7)		
10	〈授業参観期間 10/18〜〉	10/16:研究日②(グループ活動2回目) (授業実践に向けて)	授業参観の日程調整
11	〈授業参観期間〉 R5 校内研究アンケート実施 現職教育研修会②(11/13)	授業参観	
12			意識調査②まとめ
1		1/22:研究日③(グループ活動3回目) (評価・改善、まとめについて) ※全体会での発表について	R5 まとめ・R6 計画 立案 研推委② 1/25
2	R6 校内研究テーマ、方向性に ついて検討・確認 (職員会議)	2/2:授業実践報告書提出締切	
3	第2回研究全体会(3/18)		R5 研究紀要作成・発 送

VIII 研究の実際

1 全体での取組について

1) 現職教育研修会

キャリア教育の基礎を学びキャリア教育の視点について共通理解をするために、夏休みに外部から講師を招聘し、演習も取り入れた研修を行った。また、アンケートで要望の多かった「重度重複障害児の発達と自立活動」の研修会も実施し、本校の中心課題のひとつに挙げられる重度重複障害児への支援についての学びを深めた。

○現職教育研修会①(7月25日)

「障害のある児童生徒のキャリア発達を支援する教育の意義と実践教育」

○現職教育研修会②(11月13日)

「重度重複障害児の発達と自立活動」

2) 「キャリアの視点シート」の活用

授業づくりにあたり、キャリア教育で育成すべき力「基礎的・汎用的能力」を基に作成した「キャリアの視点シート」にチェックを入れることで、児童生徒の実態や課題を整理した。【キャリアの視点】は指導案(略案)にも書き入れ、授業のどの場面で意識して取り組むのかを明確にした。

3) 研究グループ活動

対象児童生徒の実態（教育課程）等に応じたグループを編成し、児童生徒の教育的ニーズをキャリア教育の視点でどのように捉えたらよいか話し合い、略案をもとに目標や評価の妥当性等について意見交換を行った。

4) 【キャリアの視点】を意識した授業実践

参観期間を設定してグループ内で互いの授業を参観し合い、参観シートによる意見交換を行った。

5) 研究全体会の実施

1回目は5月に実施し、キャリア教育について基礎知識として「基礎的・汎用的能力」等について全員で研修し、今年度の研究の計画や方法等について確認した。2回目は今年度の成果や研究グループ活動の様子について年度末に共有した。

2 指導主事学校訪問指導における各学部の指定授業について

指導主事学校訪問指導で、各学部の指定授業が行われた。指定授業でも「キャリアの視点シート」を使用して児童生徒の実態や課題を捉えるようにした。評価については当然3観点での評価もするが、指導案には【キャリアの視点】で設定した評価のみ記載することとした。

1) 小学部

ひまわり学級2組の児童1名を対象に、自立活動「先生と一緒にやってみよう」という授業を行った。【情報の理解・選択・処理】の視点から、児童が人や物、働き掛けに対して注意を向ける力の育成や、【他者に働き掛ける力】【コミュニケーション・スキル】等の視点から、働き掛けに対して表出する力の育成を目指し、体操や楽器を鳴らす活動、様々な感触のものに触れる活動等を行った。児童が高等部を卒業したらどうなるのか、児童にとって主体的で対話的で深い学びは何かを考えると良いという助言をいただいた。

2) 中学部

ひまわり学級2組の生徒2名を対象に、自立活動「ファンタジーランドを楽しもう」という授業を行った。スヌーズレンの手法を生かして様々な刺激を提供し、生徒と教師、または生徒同士のコミュニケーションに視点を置いた取り組みを行った。多重感覚環境を設定し、教師が生徒の主体性を尊重し共感しながら関わっていくというスヌーズレンの基本を踏まえつつ取り組み、教師の働き掛けに対して各生徒ともにそれぞれの方法で返事を返すなど、意思表示する様子も見られた。

教師は生徒に対して言葉掛けをしなければならないことが多いが、あえて間を取ったり無言になったりする空間を作り出すことで生徒がどのような反応を示すか試してみると良いと助言をいただいた。

3) 高等部

Bコースの生徒4名を対象に、作業学習「モザイクタイルによるコースター作り」という授業を行った。製作したコースターの販売会を設定することで、製作への意欲付けを図ることや、生徒の実態に即した用具や補助具を使用することで少ない支援で製作を進め、自己肯定感を高めることをねらいとした。また、分担・協力する場面を設定することで、自分の役割に責任をもたせ、お互いの得意・不得意などを認め合う関係をつくっていくこともねらいとしてきた。

学習の積み重ねにより、生徒自身が準備段階で不備に気づき、自分に合った方法が分かって効率よく作業を進めたりすることができるようになった。また、上手いかなかったときに、分担を依頼する姿や教師に相談する姿も見られ、自分の特性を理解しつつ、より良い方法を自分で考えようとする

力も育ってきていることがうかがえた。

キャリア教育の視点が入った今回の指導案はとてもシンプルで分かりやすいものであった。作業学習のように「合わせた指導」は各教科の目標が前提になっていることを忘れずに授業作りをしていくこと、PDCAサイクルに従いさらに授業改善を図ってほしいと助言をいただいた。

IX 研究のまとめ

1 成果と課題

1) キャリア教育の基礎についての共通理解

年度初めの研究全体会で「キャリア発達」「キャリアの視点」「基礎的・汎用的能力」といった基礎的な内容について確認することからスタートした。「キャリアの視点シート」を使って対象児童生徒の実態や課題について「基礎的・汎用的能力」を軸に整理することで、普段の授業で取り組んでいることや児童生徒の目標について「キャリア教育」の視点で捉え直すことができたと考える。「キャリアの視点について改めて見直すことができて勉強になった」「キャリアの視点を授業のどの部分でどのように扱っていくのかを考えるようになった」といった意見が多かった一方で、「キャリア教育はどの児童生徒にも大切であり障害の軽重には関係ない、ということは研修会等を通して理解はしているものの、自発的な反応を見取ることが難しい」「超重度の児童生徒のキャリア教育というものにはまだ難しさを感じる」という意見もあった。現職教育研修会では実践経験豊かな講師を招聘し、基礎知識を固めるとともに、実践例の紹介やPATHの演習も取り入れていただき、盛りだくさんの内容で学びの多い研修となった。

2) 研究グループ活動

学部に関係なく対象児童生徒の実態によってグループを編成することで意見交換の深まりを期待できると考えた。教育課程別で編成したところ（児童生徒の在籍状況から）学部が偏ってしまったグループもあったが、「他学部の学習の様子や、自分の授業に対する意見を聞くことができて有意義であった」「教科が違うと意見交換は難しいと感じたが、他教科での生徒の姿を知ることができたことは指導の参考になった」という感想も聞かれた。少人数編成のよさはあるが、出張等のために欠席者があるとグループとしての活動が難しく感じられる場面もあった。

各グループの概要は以下のとおりである。

○Aグループ

本グループは、訪問教育を受けている児童生徒と、自立活動を主とする教育課程で学ぶ 重度重複生徒を担当する教員のグループである。中途障害の生徒を含め、医療的ケアを必要とする重度の障害を有している児童生徒であり、キャリア教育の視点で学習を捉えていくことの難しさがあったが、身体の感覚に働き掛けて表出を促すことでコミュニケーションスキルの向上を図ろうとする取組を積み重ねてきた。働き掛けにより表出が見られた時に、その児童生徒にとって分かりやすいフィードバックをしていくこと、特に言語でのフィードバックには言語の精選が求められること等が話題となった。また特に訪問教育は、児童生徒の情報収集や学習環境設定の協力等を得るために保護者や医療スタッフとの関係作りが重要であることも話題となった。本グループは実際の授業をお互いに見合うことはできなかったが、グループ活動時に動画を見ながらお互いの実践を紹介し合った。普段は一人で授業を行い評価も行っていることがほとんどなので、実践の様子を見ながら話し合うことで、客観的な評価や助言を得る機会となった。

○Bグループ

高等部の知的代替の教育課程の生徒を担当する教員のグループである。本校卒業後の進路として就労移行支援事業所や就労継続支援事業所を希望する生徒が多く、高等部のうちに身に付けさせたい力について普段から意識して指導にあたっており、【キャリアの視点】についてもイメージしやすかった。対象生徒が重なった場合、指導案についての意見交換をとおして生徒理解をより深めることができた。担当教科以外の指導案に対して意見することが難しいという意見もあったが、他教科の授業を受ける生徒の姿を参観できたことで、他教科との繋がり大切さを改めて感じ、自分自身の授業の改善に役立てるきっかけとなったという意見もあった。一度の授業だけで考えるのではなく、キャリア教育は長い視点で捉えていく必要があると改めて再確認できた。

○Cグループ

中学部と高等部の準ずる教育課程の生徒のうち、本校卒業後に自宅からの通学や通所を希望している生徒を担当する教員のグループである。受験・進学を控えた対象生徒もおり、卒業に向けて何を身に付けさせたいかという【キャリアの視点】についてイメージはしやすかった。教科指導の場面でキャリア教育をどのように進めたらよいかについては、文部科学省ホームページの「キャリア教育の手引き」にある「各教科等における取組」を参考にして、各教科の特性と関連させながら検討した。今年度の準ずる教育課程は全ての学年が一人学級のため、学び合う場面の設定や伝え合う力の育成に苦勞しているなど共通する悩みについても話題となった。また、他教科の取組に対して意見を述べるのが難しく協議を深めることは難しかったという感想もあったが、対象生徒の他教科での取組の様子から自身の授業づくりの参考になる部分も見つけることができた。

○Dグループ

高等部、準ずる教育課程の病棟生を担当する教員のグループである。筋疾患の高2男子を対象生徒として研究が行われた。本生徒は、幼児の頃から親元を離れ病棟で暮らしており、寡黙な人柄や社会経験の不足からか、学校生活の中でも単語のみで応じることが多い。高等部卒業を一年後に控え、【コミュニケーション・スキル】や【他者に働きかける力】の向上が急務であると共通理解されている。グループ内で互いの授業も参観し、課題も認識した上で、どんなアプローチが有効か意見交換を行った。本人の進路希望は今漠然としているものの、将来的には得意とするICT関連の仕事をするのが考えられるため、会話の力を一朝一夕に身に付けさせることは困難だが、「話す」代わりに「書く」ことで意思を把握することや頷き・相槌等の非言語コミュニケーションを用いることなども可能性として話された。

本人は理解しているが、表出に苦手意識があり、時間がかかる。何らかの方法（選択肢、穴埋め等）を用いながら、本人の考えを粘り強くアウトプットさせる学習を試みていく必要性も確認した。また、本人に関わる先生方が同じ方向を見て働きかけることも大切と合意した。

○Eグループ

小学部から高等部までの知的障害（重度重複）学級を担当する教員のグループである。重度重複障害のある児童生徒へ【キャリアの視点】で身に付けさせたい力を具体的にイメージすることは難しかったが、働き掛けに対して表情や身振り手振りで応える、自分から報告をするといった【コミュニケーション・スキル】や、活動の中で係の仕事や自分の役割に取り組むといった【自己の役割の理解】を特に育成したい力に上げて取り組んできた。学部を越えた授業参観は、児童生徒

の今後の姿をイメージしたり指導の在り方を考えたりする上で貴重な機会となったという感想が多かった。他学部の教員との意見交換はお互いの参考になり、現段階でどのような力を身に付ける必要があるのか、またそのために日々の指導をどのように工夫していくのかなどをそれぞれ考えることができた。

3) 授業実践と参観

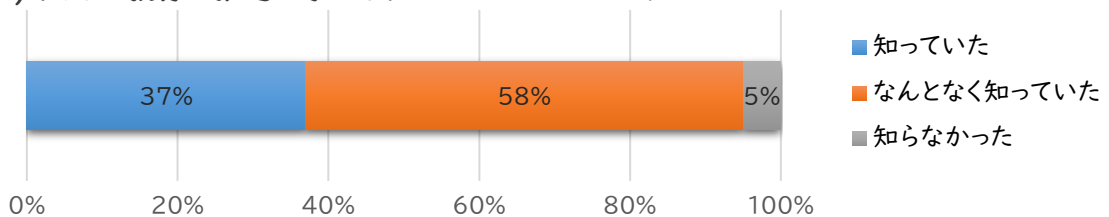
一人一回授業を実践し、グループ内で参観し合うことで学び合いの機会を設定してきた。グループ内で出た意見を普段の授業に活かしていくことでPDC Aが回っていくことを期待していたが、グループ活動や参観シートで得られた意見や反省を次の授業に活かすところまではいかないことが多く、実践途中での研究部からの確認や声掛けが足りなかったと感じる。

授業参観の設定については、「同じ学校にいながら他学部の学習の様子を知る機会がほとんどなかったのととても勉強になった」といった意見が多く聞かれたが、一方で、「参観のための授業の調整や児童生徒の欠席による度重なる日程変更等への対応に苦しんだ」という声もあり、時期や方法等についてはさらに検討する必要がある。また、「授業づくり＝授業実践とするのではなく、事例研究としたほうが取り組みやすかったのでは」という意見もあった。

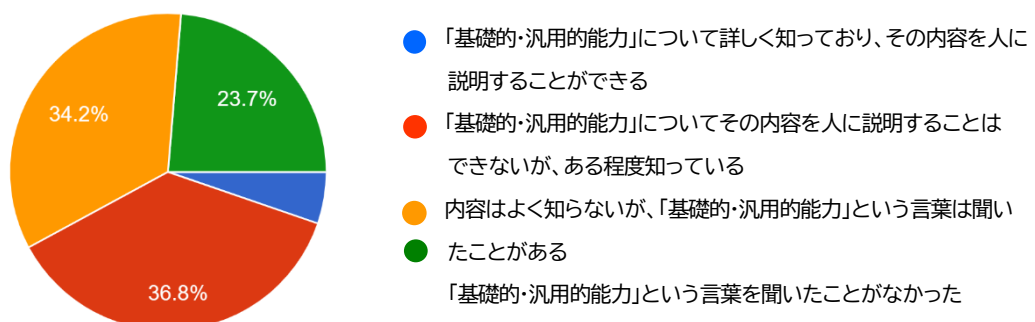
4) キャリア教育に関する意識調査の結果から

5月と1月に実施した意識調査の結果は以下のとおりである。年度当初は、キャリア教育について具体的に説明できたり日々の授業で意識して取り組んだりしている教員は少なかった(質問1、2)。それぞれの授業で児童生徒に何を身に付けさせたいか明確するために、まず「キャリアの視点シート」を作成し、キャリア教育で育成すべき力「基礎的・汎用的能力」について簡単にチェックできるようにした。また、キャリア教育等に関する資料が掲載されている様々なサイトを紹介したことで多くの教員が文科省のホームページ等でキャリア教育の定義や様々な実践例について調べており(質問3)、それを基に【キャリアの視点】を意識した授業を実践するという経験をとおして、自信をもって「キャリアの視点を意識して授業をしている」と言えるようになっている(質問4)。

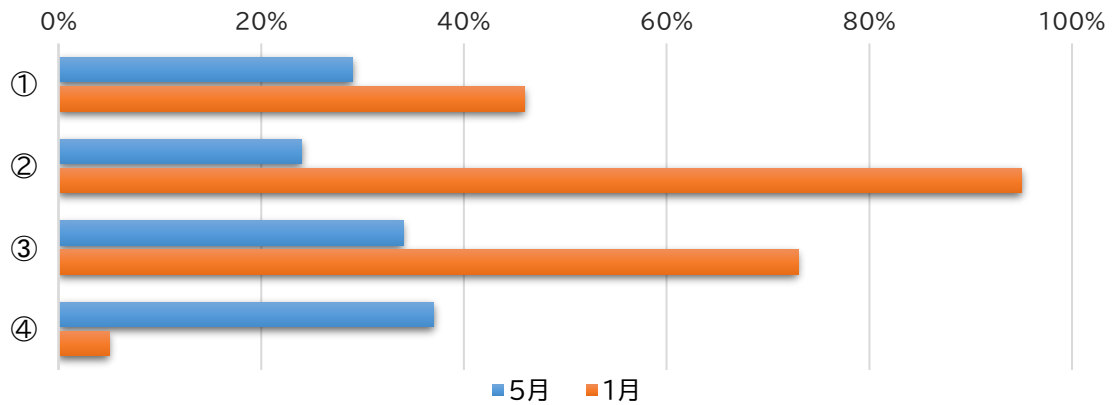
(1) キャリア教育の推進が求められていることについて知っていたか



(2) キャリア教育で育成すべき力「基礎的・汎用的能力」について知っているか

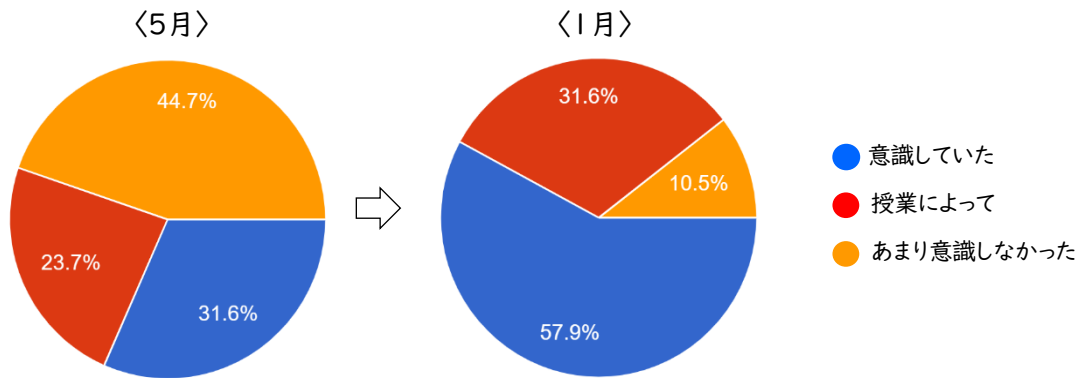


(3) キャリア教育に関して経験のあるもの



- ① 文科省や国研、都道府県や市町村、教育センター等行政機関作成のキャリア教育に関するウェブサイトを見たことがある
- ② キャリア教育の研修会に参加、またはキャリア教育をテーマとした講義等を聞いたことがある
- ③ キャリア教育の実践等について、インターネットや本で調べたことがある
- ④ いずれも経験がない

(4) 児童生徒に対してキャリア視点を意識して授業をしているか



「2.授業によって」で挙げられた授業

〈5月〉自立活動、作業学習、情報

〈1月〉自立活動、作業学習、情報、総合、生活単元、家庭科、地歴公民(地理)、英語

2 今年度のまとめと今後に向けて

これまで、「キャリア教育は大事である」「キャリア教育≠進路学習」と耳にしてはいても、キャリア教育の視点と各授業の目標との関連を意識して実践していた教員は少なかった。今年度の取組だけでは、キャリアの発達段階や学習内容の系統性などに広げ深めるには至らなかったが、取り組む中でそれが必要だと実感したり、児童生徒の具体的な将来の姿について話題にしたりする機会をもつことができたことは成果の一つと考える。そして授業ごとに「特に育成したい力」を絞りそれを意識した授業づくりを行うことが、指導内容の構築や働き掛け方等の精選にもつながったという声もあった。

本校の児童生徒は、障害の程度が重くとも、他者や社会とのかかわりの中で様々な役割を担いながらそれぞれのライフステージを生活している。日々の学習の成果をすぐには感じられない児童生徒も多い本校において、今年度の取組で得た知識とキャリアの視点を今後ももち続け、児童生徒の明るい将来を思い描きその可能性を広げるための授業づくりに努めていくことが、より一層求められる。